

『譯文筌蹄』についての一考察

—その術語を通して—

語学者としての荻生徂徠（一六六六—一七二八）の著作には、意味の似かような語をグループにしてその差異を解説した『譯文筌蹄初編』（正徳五、一七一五年刊）、その死後、竹里散人（安激彦）が『譯文筌蹄初編』にもれた百有余字と散人自らが集録した千有余字とに訓訳をほどこして出版した『譯文筌蹄後編』（寛政八、一七九六年刊）と助語（助辞）についての専書『訓譯示蒙』（元文三、一七八三年ごろ刊）がある。

これらの底稿となったものは、徂徠二十五、六歳のころの講義を門人吉田有鄰と僧天教とが筆録したものである。この講義は評判になったようで筆録・伝写された写本も多く自らも「蒙生伝写して、脛無きに千里の外に走る」と「題言十則」の冒頭に述べている。

このような写本の一種が国立国会図書館に『譯文筌蹄』（十一巻）としてあり、これを前記刊本と比較してみると、この巻一（巻五に当たる部分）が『訓譯示蒙』に、巻六・七・十・十一に当たる部分が『譯文筌蹄初編』に、巻八・九にあたる部分が『譯文筌蹄後編』に該当すると戸川芳郎氏は述べておられる^註。

この国会図書館蔵本が底稿となったものでないとしてもこれに類似した写本に加筆して刊行したものが『譯文筌蹄初編』であり、手を加えることなく死没し、その後刊行されたものが『譯文筌蹄後編』と『訓譯示蒙』であろう。

國 金 海 二

本論では『譯文筌蹄初編』と国会図書館蔵本にみられる術語を通して、(一)徂徠の用いた術語（活字・死字・実字・虚字など）、(二)講義録と増訂を加えた『初編』との間の差異、(三)『初編』の「題言十則」中にある術語との関連、(四)『初編』と『後編』との関係、などについて考察を加え徂徠の語学研究の一端にしたい。

（注）汲古書院『漢語文典叢書』（第三巻）、および、みすず書房『荻生徂徠全集』（第二巻）の解題。

○使用テキストは『漢語文典叢書』

○『譯文筌蹄初編』を『譯筌初編』、『同後編』を『譯筌後編』、国立国会図書館蔵本を『国会本』と略称。

○引用文の表記は「」を「コト」に改めるなど必ずしも引用原則の表現のままではない。

○『訓譯示蒙』との関係については、注記するにとどめた。

(一) 術語について

活 字

「活字」という術語は『国会本』には次の四項目中に用いられている。（『譯筌初編』の同じ項目も並べ挙げる。）

〔撼〕(国) ユルガスト譯ス 活字ニ限ルナリ 動揺ノ二字ハ死活ニ通スルナリ

〔訳〕 ユルガスト譯ス 使然ニ限ル 大風撼^ス屋^ヲ 波濤撼^ス山^ヲ ナド

……

〔推〕(国) クダクナリ 活字ナリ

〔訳〕 竹木又ハ家又ハ器ナドヲクダキヒシグコトナリ……

〔碎〕(国) クダケルトヨム 細ニ破ルルコトナリ 死字ナリ 活字ニモ用フ

〔訳〕 クダククダク 訓ノ如シ 細^ニ破^ル也ト云フ注好シ……

〔悦〕(国) ……喜トハ違フゾ 喜ハ情ノ名ナリ 故ニウレシカル念ヲ云フ 悦ハ活字ナリ 必物ヲヨロコブコトナリ 故ニワザナリ

〔訳〕 中心ニヨロコブコトナリ……ウレシガルト譯ス……

右について考察を加えると、まず四語とも動詞であり、「活字」とは動詞に関しての術語であることがわかる。

そして『国会本』では〔撼〕を「ユルガス」と訳し、「推」を「クダク」と訳していることから、動詞のうちの他動詞を「活字」としているのである。このことは〔撼〕の項で「動揺ノ二字ハ死活ニ通スルナリ」とあるが〔揺〕の項をみると「ユルグト譯ス……ユルカストモ」とあり、「悦」の項に「必物ヲヨロコブコトナリ 故ニワザナリ」とあり、また〔虐〕の項には「シエタクトヨム……但シ此訓ハ活字ニテ虐^ス民^ヲト使フトキノコトナリ」とあることから明らかである。

次に同じ項の『譯筈初編』をみると、この四語の解説に「活字」という術語を全く用いていない。〔撼〕の項で「活字ニ限ルナリ」という『国会本』の解説を「使然ニ限ル」としているところから他動詞とは認定しているが「活字」という術語は用いていないのである。

『譯筈初編』にも「活字」という語は〔盡〕の項に一例だけ「行盡^ス 看盡ナドト活字ノ下ヘ付字ニスルコト盡ノ字ニカギル」とあるが、これは『国会本』でいう他動詞としてではなく単に動詞という意として用いているようである。

〔注〕『訓譯示蒙』(巻一)にも「動字活字ハ事ナリ 故ニ其道具ヲ使フ字ナリ」とある。

死字

「死字」という術語は『国会本』には三か所に使用されている。

〔昭〕(国) 明字ト同シ 但シ死字ナリ 明字ハアキラカナリアキラカニスルアカス 昭字ハアキラカニスルバカリニ用フ アカストヨムコトナシ……

〔訳〕 アキラカアキラカニストヨム アカストヨムコトナシ……

〔碎〕 活字の項参照

〔益〕(国) マストヨム 水ニ従フ字ユヘ數ヲ以テハ云ハ又辭ナリ……音ニテヨミテ死字ニ用ルトハ倭語ノ得損ノ得ナリ

〔訳〕 マスト訓ズ 明カナリ 義廣キ字ナリ……

『国会本』の〔碎〕の項をみると、「クダケル」と自動詞として用いるときは「死字」であり、「活字ニモ用フ」とあることは『譯筈初編』にある「クダク」という訳し方に対応するものである。

〔益〕の項には、「死字」という術語が自動詞という意味として用いられる外に、動詞としての作用をやめ、他に働きかけることのない名詞としての用い方が加わっている。

そして、この三項目でも『譯筈初編』には「死字」という術語は使

用されていない。しかしこの語自体は次のように用いられている。

〔欲〕ホツスト訓ス ナニテモ其事ヲシタク思フナリ……死字ニ用ル

トキハ音ニテヨム 利欲人欲色欲ナリ……

〔知・識〕二字トモニシルト訓ス……死字ニ用ルトキ知ハ去聲ニナリテ

智ト同シ 識ハヤハリ入聲ニテ見識ナリ

〔慮〕オモンハカル 思慮ト連用ス……慮ハ又謀慮智慮ト連用ス 死字

ニナルナリ

〔量〕ハカルト訓ス……死字ニ用ユルトキハ分量度量大量ナト皆ウケ入

ルルホドヲ云フ

〔料〕ハカルカソフトヨム……死字ニ用ユルトキ廩料三品料ハ祿ノコト

ナリ

この五例が全てであり、ここからわかることは、『国会本』で自動詞をいう「死字」という用い方はなくなり、動詞としての働きをとめてしまい、名詞に転成したものを「死字」としていることである。

また、この五例中〔知・識〕の項を『国会本』と比較してみると「知識ノ二字大抵通用ス 但シ知ハヒロキ字ナリ 識ハセバキ字ナリ……知識ノ二字實字ニナルトキ意太タ違フ知ヲ實字ニスルトキ智ト同シ 識字ヲ實字ニ用ルトキ神識心識ノコトナリ」とあり、〔益〕の項では「死字」としている名詞を「実字」ともいつていることがわかる。

実字

『国会本』では名詞をいうのに「死字」の外に「実字」という術語が使われているが、『譯筌初編』では「実字」はどのような語を表す術語として用いられているか。

〔鍾〕聚ノ義ニ用ユレドモ多クハ虚字ニ用ユ 天鍾ニ美ヲ于此ニ情
所^ル鍾^ル 造化鍾^ル 秀氣鍾^ル ナドナリ 水鍾マルト使ヒタル外ハ
實字ニ用ユル少レナリ

例はこの一つしかないが、ここでは「美」「情」「造化」「秀氣」など実体のないものについていう場合は「鍾」を使い、「水」など実体のあるものについて述べるときは「鍾」はほとんど使われないとあり、名詞のうち実体のあるものを表す語として用いている。

虚字

『譯筌初編』では「虚字」は、前述のように「美」「情」など抽象的概念を表わす語についていう術語——抽象名詞という意味として用いられているが、これとは全く異なる次のような三例がみられる。

〔朋〕トモト云字ナリ 處ニヨリテ虚字ニナルコトアリ ソノ時作^ナ羣^ヲ意ナリ 尤稀ナルコトナリ

〔更〕平聲ノ時タガヒニトヨム 入レカワル意ナリ 然レドモカワルトヨム時ハ虚字ニテ タガヒニトヨム時ハ助字ナリ……

〔互〕モノノ入レチガフタルヲ云フ……虚字ニ用ヒテタガヒナリト云時 錯字ト近シ……

これらでは〔朋〕を「群をなす」、〔更〕を「かわる」などという動詞になることを「虚字」となるとしており、「虚字」を動詞という意味に用いているのである。

『国会本』では、この術語は次に挙げる一か所にしか表れておらず、動詞という意味として用いられているのか、名詞としてか判然としな

い。

〔豁〕元來谷ノ開通スルヲ云ナリ……虚字ニ用ルトキ此豁字ノ意ツカヘ

フサガツタ中ニクハラリト開タ處一條アルコトニ用フ 又ツカヘフ
サカツタ處ガ乍ラクハラリト開ケタル意ニモ用フルナリ

(注) この「虚字」という語の使い方は徂徠の『論語微』に引いた朱註の「已造^三乎正大高明之域^一、特未^三深入^二精微之奥^一耳、未^レ可^下以^二一事之失^一而遽忽^{上レ}之也^一」について、「……且正大高明、精微之奥、徒以^二虚字^一形容之^一、而未^レ詳言^二其何所^一指焉^一と述べ、「正大高明」「精微之奥」などの語を虚字としていているのと同じである。

助語（語助・助字）

『譯筌初編』には、助語、語助、助字という術語が散見する。これらは江戸時代の多くの学者が最も力を注いで研究したものの一つである。^(注1)

徂徠には前述のように助語についての専書『訓譯示蒙』があるが、ここでは『譯筌初編』ではどのような語を助語としているかを検討したい。これらの術語は本文中に四十余か所用いられているが代表的なものを例示する。

(イ)〔特〕コトニトヨム時トリワキテト云意ニテスグルル意アリ モト獨ト義通シテヒトリノ意ノ字ナルユヘナリ 右ハ上ニ用ユルニ限ル 助語ノ時ノコトナリ

(ロ)〔始〕ハジムハジメハジマルハジメテ皆用ユ 終末ノ反對ナリ ハジメテノ時去聲ト云フ説アリ コノ時ハ助語ニナルナリ

(ハ)〔更〕タガヒニトヨム時ハ助字ナリ 故ニ助字ノ時互字ト同ヤウニ用ルナリ

(ニ)〔過〕經過ノ義ヨリ轉用シテ輕ク助語ノ如クニ用ヒタルアリ 看過^ス 讀過^ス 用過^ス ナト多クハ已字ト照シ用ユ 已^ニ看過^ス 已^ニ讀過^ス ナトナリ……

(ホ)〔耐・堪・勝・任〕皆タヘタリタフルトヨム 耐^ク久^ク 耐^ク寒^ニナト久キニタタヘサムキニタタユルナリ……不堪^ヘ見^ル 不堪^ヘ聞^ルムサクテ見ラレヌアハレニテ見ラレヌ聞ラレヌナリ 難^シ勝^テ數^也トハ數ノ多クテカソヘ合セラレヌナリ 用ヒヤウニ輕重アレトモ皆力ノ及テタユル意ニ用ユ 助語ノルイナリ

(ヘ)〔欲〕ホツスト訓ス ナニニテモ其事ヲシタク思フナリ ストヨム時ハ助字ナリ 將字ノ意ナリ

(ロ)〔惟〕伏惟恭惟惟夫ナト發端ニ用ユル助語ナリ 最初ニコノ字ヲ置テ其オモフコトヲ下ニ書クナリ 義ハ以爲ノ二字ホドノコトナリ 又思惟忖惟ト云フトキハ助字ニ非ス……

(ハ)〔欣・忻〕同字ナリ 喜ト同義ナリ……喜^{クハ}是^レ 最^モ喜^フ 且^シ喜^スラフナトト助語ノヤウニ用ユルコトナキナリ

(リ)〔恐〕未來ヲオソルルナリ 故ニ助語ノヤウニ轉用シテ大形カクア ラント末ヲキヅカフコトニ恐^{クハ}如^レ此^ト用ユ……

(ヌ)〔已〕助語ニ用ル時 上ニ置ケバステ下ニ置ケバノミトヨムニテ語ノ筋知ルルコトナリ

以上十例は次のように四つに分類することができる。

(一)、(イ)〜(ロ)にみられるように副詞を助語とするものであり最も多く、その解説は次のように俗語にまで及んでいる。〔緊〕俗語ニ不要緊ト云ハサマデ入用ニモナキコトセンナキコトナリ 要緊ハセンニ入用ナルコトナリ 好得緊ハキツクヨキコト 冷得緊ハキツクサムキコト 畢竟得緊ノ二字助語ノ如シ

(二)、(ニ)〜(ハ)は助動詞を助語としたものである。(ニ)の〔過〕は完了、過去の経験を表す助動詞、(ホ)の〔耐……任〕は可能を表す助動詞、(ヘ)の〔欲〕は将来に関する助動詞である。

(ニ)の〔過〕は完了、過去の経験を表す助動詞、(ホ)の〔耐……任〕は可能を表す助動詞、(ヘ)の〔欲〕は将来に関する助動詞である。

(三) (ト) (リ) の例は、発端に用いる語を助語としたものであるが、日本文法でいう「ク語法」にあたるものを助語として扱ったかは不明。^(注2) (四) (ハ) は終助辞を助語としている例である。このような語気詞を助語として解説しているのはこの一か所であるが徂徠の考え方を知らることが出来る。^(注3)

(注1) 助語について徂徠は『訓譯示蒙』のなかで「就^{ナク}中助語ヲ知ラザレハナラヌコトナリ 助語ハ文ノ關鍵ナリ 實語ヲ引マハスモノナリ」(卷一)、「粉骨碎身シテナリトモ知ルヘキモノハ助語ナリ 助語ガスマヒデハ意味モ文勢モ文法モトクト合點ユカヌナリ」(卷二)と、その重要性を強調している。

(注2) 江戸初期に渡来した『助語辭』(元、盧以緯)には「発語ノ端」としてこれらと同じ範疇に属すると考えられる語を挙げていゝる。また『訓譯示蒙』には「惟」について「惟字ハ専ラニ一事ヲ思フナリ 故ニ夫惟伏惟ナドト使フ 皆一事ヲ専ラニ思フ意ナリ 助語ノ時ハコレトタグト兩義アリ……」(卷五)とあり、異なった解説をしている。

(注3) 『論語徴』にも「以吾一日長乎爾、乎爾語助辭、朱註以汝解爾、失古言也」とあり「乎爾」などの終助辞を「助語」「助語辭」としている。

『譯筌初編』では以上のような語を「助語」としているが、『国会本』では次のような語氣的な語をしている例が一つあるだけなので詳しく検討することはできない。

〔願〕一言ト書トキ ヲモツツトモヲモツツココニトモ訓シテ 言字助語ナリ……

〔付記〕なお両書に「付字」という語が用いられているが、これも「助語」の一種(語勢を助ける意味のないもの)と考えているようである。

〔国〕〔憐〕カナシムヨリ愛スル方重シ カハユヒト云ホドノ辞ナリ ……可憐生ト云俗語モ生字付ケ字ニテカハヒラシイト云辞ナリ
〔訳〕〔盡〕……行盡^ス看盡ナドト活字ノ下ヘ付字ニスルコト盡字ニカ
ギル

形容字

『譯筌初編』にはこれまでに述べた術語のほかに「形容字」という語が二十か所余りに使われている。

〔寂・寞・寥・闕〕……物シツカナルコトライヒサビシク物音ノナキコトニ多クハ用ユ ソノ内寞字寥字ハ多クハ諛語ニテ寂寞寂寥ト用ユ 單用スルトキモ皆形容字ニテ寞トシテ寞タリ寥トシテ寥タリナトト用ユ 又ハ下ニ平字然字如字ナトヲ付ルナリ……大抵コノヤウナル形容字ハ倭語ニ譯シカタシ 倭語ニモリントシテシヤントシテナド云フヤウナル形容ノ語亦漢語ニ寄シカタキカコトシ
〔耿〕小明ノ貌ナリ 形容字ナリ アキラカニストハ用ヒス
〔凜〕コレモ形容字ナリ 凜凜ハ凄凄ヨリツヨクサムキケシキナリ……威勢ノツヨキテイ又ハヲソルケシキニモ凜凜ト用ユ
〔愀〕ウレフトヨメトモ形容字ナリ 愀然愀乎ミナ顔色ヲ變スル良ナリ
ウレフルニハ非ス

これらの例から推測される「形容字」とは、「……ノ貌」「……ノケシキ」「……テイ」とあるように、ものごとの状態を表す語である。そしてこれについて

- (イ) 単独でも用いられるが他の語と連用されることが多い。
 (ロ) 「乎」「然」「如」など状態を表す形容詞のあとに添える語とともに用いられる。
 (ハ) 従来の和訓では、形容字を動詞のように読んでいる場合があるが區別する必要がある。
 (ニ) 日本語への翻訳は困難な語である。
 と述べている。

このように『譯筌初編』では細かく注意を払っている形容字も『国会本』には次の二例があるのみである。

〔聞(闕)〕寂ト同意ナリ 聞乎無聲 聞其無人ナドアリ 但シ聞ハ形容字ナリ 寂ハ形容ニモ使ヒ又只ノ辭ニモ用フ

〔謫〕次第ニ盛ニナリユク意ナシ 形容字ナリ 多美ノ貞ナリ シケリ
 サカンニシテウルハシキ體タラクナリ

ここにおける形容字の定義は「……體タラクナリ」とあるように状態を表す語を言っているようであり、『譯筌初編』と同じである。

(二) 二本間の差異について

以上『国会本』と『譯筌初編』とにみられる術語について、徂徠はどのような概念規定をもつて使用しているかを考察してきたが、その間に差異のあるものがある。ここではそれが何によつたかを考えたい。

まず「活字」「死字」については、前に記したように、『国会本』では他動詞を表す術語を「活字」、自動詞と名詞を表すものを「死字」といつているのに対して、『譯筌初編』では動詞を「活字」、動詞から転成した名詞を「死字」としている。これについては、次の二つのこと

が考えられる。

- (イ) 徂徠はある語が他の語に作用を及ぼす意味をもつ動詞か否か——他動詞・自動詞——について区別を試みようとしたことは確かであるが、^連自他の対立・対応が必ずしも明確でないのでその区別をすることを断念した。

(ロ) そして混乱をさけるために、同じ「死字」という術語に自動詞という意味と名詞という意味をもたせることをやめ、転成名詞についてののみこの語を用いることにしたのである。

次に「実字」「虚字」についてみると、『国会本』では名詞を表すのに「死字」という語とは別に「実字」という術語も用いているが、その間に差異は見出せない。そして『譯筌初編』では「実字」という語は「死字」と同じく名詞をいうのであるが、動詞より転成した実体のないものについていうのではなく実体のあるものについていつている。これは二つの間に実体の有無とことばの成り立ちの違いを認めただからだと思われる。

「虚字」については、『譯筌初編』では抽象名詞と動詞という二つの術語に用いられている。これは実体ある名詞を「実字」としたときには、それに対応する実体のない抽象名詞に「虚字」という術語をあてはめたからであろう。

「形容字」については両書の間に特に異なつた点はみられない。

(注) 『訓譯示蒙』(巻一)にも以下のように述べられ、活字を他動詞として用いる。「死活ト云ハ タトヘハ清字 字ノマナレバキヨシトヨム 死字ニスルトキハキヨキトヨム 活字ニスルトキハキヨムトヨム 歌ノ字 字ノマナレハウタフトヨム 死字ニスルトキハウタトヨム 活字ニスルトキハウタハシムトヨム 舞ノ字ノマナレハマウトヨム 死字ニスレバマヒトヨム 活字ニスルトキハマハストヨム」

(三) 「題言十則」中の術語との関係

次に『譯筌初編』巻首の「題言十則」のなかで述べている語の四分類と本文中の術語との関係をみたい。

「題言十則」では次のように語を四つに分類している。

「是の編、形状の字面有り、作用の字面有り、聲辭の字面有り、物名の字面有り。詩家の所謂虚實死活、即ち是の物なり。『文野』中に説く所、上下位置の法、必ず四者を以て準と爲す。故に是の編、亦た此の四者を以て部目と爲す。」(原漢文)

この徂徠の形状、作用、声辭、物名という四分類につけた名称は、「作用」という語以外は本文中に見られないものである。

しかし序文と本文とが全く関係が無いとは考えにくく、少なくとも講義の筆録に手を加えていた時には、語の処理に関して四つの分類法を意識していたに違いない。

では「題言十則」中の四分類は本文中のどの術語にあたるかをみたい。

(ア)形状の字面：形容字（現在の分類では、形容詞）

(イ)作用の字面：活字、虚字（現在の分類では、動詞）

これについては、本文中（復）の項に「^{モトル}諫ト云フ時ハ作用字ニモナルナリ」とあり、〔静〕の項に「總シテ静ノ字ハ作用ノ文字ニ連屬セス 静言トイフ字ナトアレトモ……」とあり、前者は「復」という語を「モトル」と「作用字」としても読むことについて述べ、後者は「静」という語は「作用の文字」である「言」と連続することはないという意であり、これらからも「作用字」は現在の動詞であることは明らかである。

(ウ)声辭の字面：助語（現在の分類では、副詞・助動詞・語氣詞など）

(ニ)物名の字面：死字、実字（一か所「虚字」という術語が用いられている。現在の分類では、名詞）

このように当てはめることができるが、このような名称は一般的とはいえない。徂徠はなぜ一般に通行している実字、虚字、助語（助辞・助字）などの術語を使わなかったか。次のような理由が考えられる。

(ア)中国の語法書、詩論書などで用いられているこれらの語の概念がまちまちであること。

(イ)虚字（用言）を動詞と形容詞とに分ける独特の分類法に当てはまる従来からの用語がないこと。

(ウ)彼自身の新しい分類法には新しい術語を用いたかったこと。

(ニ)これらの外に、「虚字」という語を本文や他の著作では一般的な意味以外に抽象的なものを表わす語としても用いていること、「助語」を表わす語に本文では、助語・語助・助字・付字などの語を使用しており、それらを包括する術語が必要であったこと。

(注)『訓譯示蒙』（巻一）にも、以下のように、虚字（用言）を動詞・形容詞とに分け「動ノ虚字」「静ノ虚字」としている。

「虚字トハ大小長短清獨明暗喜怒哀樂飛走歌舞ノ類ナリ 此ノ内ニ動ト静トアリ 静ノ虚字ハ大小長短清獨明闇等ナリ 動ノ虚字ハ喜怒哀樂飛走歌舞等ナリ」

この分類法に続けて徂徠は、「詩家の所謂虚實死活、即ち是の物なり」と述べているが、徂徠の分類をそれに配当することは無理であろう。これは中国の詩論書などに於て、虚字を動詞、形容詞に分けているものがないことよりも明らかである。

また「文野中に説く所、上下位置の法、必ず四者を以て準と爲す」とも記しているが、『文野（文戒）』中にもこれらの術語は用いられて

いないので、これについての徂徠の考え方を明確にすることはできない。

そしてこれらの術語は吉有鄰の「凡例三則」には「是の編の部目、半虚字有り、即ち題言の中に所謂形状の字面是れなり、虚字有り、即ち所謂作用の字面是れなり、實字有り、即ち物名の字面是れなり、助字有り、即ち聲辭の字面是れなり。」(原漢文)とあり、一般に通行する術語で解説をしている。しかしここでも虚字を動詞と形容詞とに分類した点によつて「半虚字」という新しい術語をもうけなければならなかつた。

(注)「半虚」という語は、中国の詩論書などにもみられるが、「凡例三則」でいうのとは異なっている。

(四) 『譯筌後編』との関係

次に、『譯筌初編』『国会本』について検討してきたこれらの術語が『譯筌後編』ではどのように用いられているか、またそれは両書との間に差異があるかなどを考えたい。用例が少ないので全てを挙げ、それに対応する『国会本』の項も併せ挙げる。

活字・死字

(坐) (後) シタニナルコトナリ……死字ニ用ル時ハ座ト同シ (座) 坐スル處ナリ坐スル器ナリ

(国) 下ニオルト譯ス……死字ニ用ルトキ座字ト同シ (座) 坐スル處ナリ坐スルモノナリ

(居) (後) 起ノ反對ナリ……居處坐在四字ノ差別アリ 不見其居トハ其ヲツタナリガミヘス其スハツタ様子カミヘヌト云コトナリ 不

見其在トハ其レガラルカラヌカミヘヌト云コトナリ 皆死字ニ用ヒタルトキノコトナレドモ是ニテ活字ニ用ル意ガシルルナリ……活字ニ用ル時ハ居ハ起ト對ス・ウチナナル意ナリ

(国) 起居ト對用ス……ヒロク用ルトキ居處坐在四字ノ差別アリ 不見其居トハ其居タナリガミヘヌ其キタ様子ガミヘヌト云コトナリ 不見其處ト云ハ其オツタ座敷カミヘヌト云フコトナリ、不見其在ト云ハソレガオルカオラヌカトイフコトナリ 右皆死字ニ用ヒタルトキノコトナレドモ是ニテヨリ活字ニ用ユル意ガシルルナリ……活字ヘ用ルトキ居ハ起ト對スルトキ打ナナル意ナリ

実字・虚字

(底・距・迄・迄) (後) 至字ト同義ナリ……迄ハ詩經ニ以迄于今 書經ニ訖于四海 大抵距ト同シ シカシ實字ニ用ユルコトナシ 虚字ニハカリ使フナリ

(国) (迄) 至字ト同シ 但シイキツク意ウスシ 助語

(來) (後) 往字ノ反對ナリ……助語ニ用ユルコト有 莊子ノ中ニ多シ 孟子ニ盍歸乎來 又淵明カ歸去來ノルイナリ 助語ニシテサソウ辭ナリ

(国) クルナリ往ノ反ナリ 反ノ反ナリ又助語ニ用ルコトアリ 莊子ノ中ニ多シ又孟子ニ盍歸乎來 此ノ來字助語ナリ サソウ辭ナリ 歸去來ノ來モ同シカルヘシ

形容字

(軼) (後) 笑貞ナリ 大笑ノコトニモナルナリ 軼然ナドト形容字ニ用ユ

(国) (軼・噓) 共ニ大笑ナリ

○「活字」について。この術語は動詞として用いられているが、自動詞・他動詞の区別を意識しているか否かは不明。

○「死字」について。ここでの用いられ方は「座ト同シ」「其ヲツタナリ」「其スハツタ様子」などと名詞としてである。そして「坐」「居」ともに動詞から転成したものと考えたように『譯筌初編』における使われ方と同じである。

なお、この語を『国会本』にあるごとく自動詞として用いたか否かは用例がないので明らかにすることができない。

○「虚字・実字」について。「今」「四海」は抽象名詞と考えられるので『譯筌初編』での用い方と同じである。また、この頃から、「実字」は実体あるものについての呼称であることは誤りないであろう。

○「助語」について。「来」のような語気詞を助語としているが、『譯筌初編』にみられる「副詞」「助動詞」などの語は本文そのものにないで、それらを「助語」としたかは不明。

○「形容字」について。この語に対する考え方は他の二書と全く同じであるが、「軛」以外にも形容字とすべきものがいくつかあるが注意をはらっていない。

〈付記〉『譯筌後編』にも他の二書と同じように「付字」という語が用いられている。これは後に記す例より、意味を有しない語勢を助けるのみの語であることがわかるが、「助語」の一つとして考えられたであろう。

〔奉〕捧ノ字ト同シ……奉調奉和奉陪ナトノ奉ノ字ヲタテマツルトヨムハアシシ コレハ只ツケ字ト意得ヘシ

〔打〕……俗語ニ一種打ト云辭アリ 何ノ義理モナク付字ナリ 打藁打發ノルイナリ

(五) 結び

最後に、以上述べた外に徂徠の語学などに関して考えられることを記して結びとしたい。

(一)、『国会本』と『譯筌初編』を比較すると、その解説の精粗は一目瞭然であり、徂徠の努力のなみなみならないことがわかる。そして術語の方面からみても『国会本』では他動詞を「活字」、自動詞を「死字」としているのを『譯筌初編』では自・他動詞ともに「活字」にするなど、その手直しも大幅である。

(二)、『譯筌初編』において名詞を表わすのに死字・実字・虚字と三つの術語を用いているのはその間に差異がみとめられたからであろう。すなわち死字は動詞より転成したもの、実字とは実体のあるもの、虚字とは抽象概念を表わす話についていうと考えられる。

(三)、「助語」については『国会本』では語気詞一つのみについて触れているだけであり、動詞などより転成した副詞、助動詞等を助語として扱う『譯筌初編』とは異なる。この転成助語に意を注ぐことが加筆の一つの目的であったに違いない。

(四)、「虚字(用言)」を動詞と形容詞とに分けるといふ徂徠の新しい分類法には新しい術語が必要となり、「形容字」「形状字面」「半虚字」などの術語を用いるようになったが、この新分類法が徂徠のなかで確立したのは加筆の時期ではなからうか。それは『国会本』に少ない「形容字」に対する指摘が『譯筌初編』では多くなり、また動詞と形容詞とを区別することの必要を述べた箇所が増加していることから推測できる。

(五)徂徠の用いた「実字」「虚字」「活字」「死字」などの術語は中国の詩論書などにも見られるが、それと同質の語として用いられたので

はない。^(註)従つて、「詩家の所謂虚實死活、即ち是の物なり」と述べていても、それに当てはめることは無理である。

(六)、『譯筌後編』には、術語が本文中にあまり用いられていないので速断はできないが、そこにみえる術語は、すべて『国会本』『譯筌初編』にあり、竹里散人が新たに用いはじめたものはなく、それらのもつ概念は特に『譯筌初編』と同じである。

(注) 例えは南宋時代の詩論書『對牀夜語』(范晞文)では「実字」は名詞・数詞をさし、「虚字」は動詞・副詞などをさす。また同じく『詩人玉屑』(魏慶之)では「実字」は名詞を、「虚字」はそれ以外のものすべてをさすようである。